

正座

能村 研三

百周年を迎えた「馬酔木」

昨年十月俳誌「馬酔木」は創刊百年を迎えた。同じ師系に連なるものとして同慶の至りである。

私は俳句を始めて五十年が過ぎたが、俳句の手ほどきを福永耕二先生に受けたこともあって、大学在学中に「馬酔木」に投句したことがある。初めて二句入選の成績をいただいた時の喜びは一入で、「二句の中から」という批評欄で大島民郎先生が「青林橋置いて卓布の騎士隠る」の句を評して下さった。その事がきっかけで第一句集の句集名を「騎士」としたらよいのではないかと登四郎から助言があった。

「馬酔木」の編集を福永先生が担当された頃であったと思う。耕二先生からの命で「馬酔木」の記念号の外部執筆の原稿を、荻窪の水原先生のお宅に何ってお預かりしてくる役を仰せつかった。まだ俳句を始めたばかりのものにとっては、役目の重大さに身もふるえるような出来事であった。おそらくは創刊五十周年記念の原稿で、水原先生のお宅の玄関先で秋櫻子先生から直接風呂敷包みの原稿と、編集部へ心遣いのお菓子

蓮枯れて水のしがらみ解かれけり
朴冬芽木々に懈怠のなかりけり
遊び終ふ月蝕雉は蛤に
遠きほど輝く波や鷹の天

竹殺し箍結ふ樽や十二月

北窓塞ぐすなはち心塞ぐこと

霜の夜や正座の暮し忘れをり

初明り己が翼に力溜め

淑気満つ一閑張の文机に

鉄瓶の音を愉しむ三日かな

をお預かりし、幕張の植松靖宅で待つ耕二先生と長崎から上京されたいた朝倉和江さんのもとに無事原稿をお届けすることができた。

昭和二十四年に能村登四郎と林翔が「馬酔木」の同人に推薦されている。その一年前の昭和二十三年には藤田湘子、林翔と共に巻頭を争い、藤田湘子と共に登四郎は「馬酔木」の新人賞を受賞した。

ぬばたまの黒節さには良寛忌

登四郎

この句は「馬酔木」昭和二十三年三月号で登四郎が巻頭をとった句で、秋櫻子先生は選後評で良寛の書いた節屋の旗が残っているという話まで引いて鑑賞してくれたそうだ。しかし、登四郎の兄弟子の波郷からは趣味に溺れた新人らしくない句と厳しい批判を受け初版の第一句集『咀嚼音』には収載されず、後に出された定本『咀嚼音』に収載された。登四郎は投句時代を含めると「馬酔木」の在籍年数は四十五年にもおよび、百年の約半分にもあたり、「沖」在籍の三十六年をはるかに越えることになる。

能村 研三